
【 異世界トリップ（仮題） 】 ポーイズラブ

行之泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【異世界トリップ（仮題）】 ボーイズラブ

【著者名】

行之泉

Z5897Y

【あらすじ】

四回で終る予定の短編集になる予定です。
異世界トリップを扱ったボーイズラブ作品です。
軽く読める短編小説を目指します。

晴天に恵まれた秋の日。

雲ひとつない爽やかな朝だった。

住宅街の辺り一面に甘い芳香が漂っていた。

金木犀の香りだ。

僕、屋久ツカネ（おくひさ つかね）は、大きなため息をついた。

大好きな香りなのにも関わらず、今日ばかりはこの香りを嗅ぎたくなかった。

一日酔いで頭がガンガンする。

：昨日は飲みすぎた。

ちょっととした振動にも響く頭を抱え後悔しながら、大学への向かっていた。

こんな時に一限目から授業だ。

大学のサークルの単なる飲み会だった。

最初は明るくみんなと合わせて飲んだ。

だけど、途中から止まらなくなつた。

飲み会の前に嫌なことがあつたのだ。

忘れようとして殊更はしゃいだのが悪かったのか、考えないようになればするほど、あの時にことが思い出された。

昨日、付き合っていた恋人に振られた。

「俺はお前の王子様じゃない」

苦しそうな顔で彼から別れを告げられた。

突然の出来事だった。

鳶色の瞳が魅力的な一学年上の男性だった。

交際は順調に進んでいたはずだった。

第一印象で好きになつたのは確かだ。
いわゆる一目惚れ。

そこに過去に出会つた人の面影を重ねていたのも事実。

でも僕自身は忘れようとしていた。

僕が王子様と呼ぶあの人のこと…

でも。

…やっぱり忘れられてなかつたんだ。

過去に忘れられない人がいることは話していた。

それが王子様だということも。

曖昧な説明をしたから、元恋人は単なる比喩だと思つて言つたのだろう。

けど、むかし僕が王子様に出会つたのは事実だ。

まだ中学生の頃。

お互いひと目で恋に落ちた。

僅かの間、幸福な時間を過ごした。

だけど、大きな問題を前に別れてしまつた。

もう逢えないし、あれは幻影を見ていたようなものだと理解しているけれど。

沈痛な面持ちで地面を見る。

本当はこのまま学校に行かなきやならないけれど、回れ右をして家に帰りたくなる。

独り暮らしのアパートへと。

その時、僕の周囲が暗くなつた。

さつきまで雲ひとつ無かつたのに、突然現れたのだろうか。

不思議に思い顔を上げる。

夢を見ているのかと思った。

広い空の上を銀色の翼をつけた馬が走つてゐる。

馬の上には若い男性が乗つていた。

僕の記憶の中にだけ存在してゐる人。

…僕の王子様。

彼を凝視していると視線に気がついたのか、馬はツカネの方へ駆けてきた。

「何を見ているのだ。愛しい我が君」

記憶の中にしか存在しなかつた彼が僕に笑いかけた。

「約束しただろう。迎えに来ると」

約束 その1 (後書き)

今回は最初から四回連載のつもりで。
試行錯誤中。

「……ディムナ」

僕は呆然として彼の名前を呼んだ。

「どうした。そんな驚いた顔をして」

不思議そうな顔をしてディムナは首を傾げた。

黄金の髪が艶やかに輝き、まるで天使が光りの輪を戴いているようだ。

白い肌は透き通っていて、まず日本人ではないと判る。鼻筋の通つた端整な顔。

懐かしさで涙が出てきそうだ。

彼を見ると、別れた元彼がいかに似ていなかつたのか判る。横顔にその片鱗が見えるだけだ。彼とはまったく違う。

鳶色の瞳は別れ際の彼の瞳の色。

この世界を動けるよう、己の存在をこの世界に馴染ませるための術の余波で変化したものだ。

その瞳が本来は灰色がかつた紫色をしているのを僕は知っている。元の姿ではない証。

眩しい笑顔を見ていると、押さえていた思ひが溢れそうになる。抱きつきたい衝動を抑えた。

どうして彼がこの場にいるのか、それを正さなければならぬ。

彼と僕は生きている世界が違う。

現実社会では起こりえない、翼の生えた馬が飛んでいるという事を見ても判る。

「迎えに来た?僕に会いに来ただけではないのですか」

「ふと。過去の思い出が蘇つてくる。

出会いは偶然だつた。

夏休み、道端で迷子になつた小さな子供を拾つた。泣き止まない子供を自宅に連れ帰り一緒に遊んだ。夜に兄と称するデイムナが現れた。

彼をひとめ見た時、僕は恋に落ちた。

彼等は妖精で女王と人間の混血だと紹介された。

父の生まれた世界を見学に来て、弟が逸れ迷子になつたらしい。僕が心の中で「僕の王子様」と呼んでいるのは、そのせいだ。妖精の世界では女王の息子である王子は沢山いるのだが、僕にとつての王子様はデイムナだけだ。

彼は迷子の弟を保護してくれたお礼を僕に言つた。

その後、弟が僕に懐いているのを見て、一週間面倒を見てくれないかと提案したのだった。

夏休みだつたし、何より一日惚れした彼と離れたくなかった。

彼の提案に乗つて僕は妖精の世界へ行き、夢のような一週間を過ごしたのちに帰つてきた。

帰宅して僕を待つていたのは、やつれ果てた祖母の姿だつた。

両親を幼い頃に亡くし祖母と一人暮らしだつた僕は、祖母に旅行をすると言つて家を出でいた。

一週間くらいと言つて家を出た僕が帰宅したのは一年後。

妖精の世界での一週間は、現実の世界では一年だつたのだ。

祖母は何も聞かず、帰宅した僕を喜んでくれた。

だけど、それ以降は祖母が病で亡くなるまで、僕は旅行を禁じられた。

中学を一年行かなかつた僕は、もう一度同じ学年を通うことになつたのだけど、修学旅行ですら欠席させられた。

今でも僕は、祖母には悪いことをしたと思っている。

あの祖母の姿を見て、僕は未練たつぱりだつた恋に終止符を打つ

た。そして今がある。

「ツカネは言つたではないか。別れたくない。私もそう思った。だからまた会おうと約束しただろ?」

「あれは…違います。このまま別れるのは寂しいと言つただけで…ディムナは、僕に会いにもう一度この世界に来ると約束してくれただけで…」

あの時の約束。忘れるはずはない。

妖精は約束を違えることが出来ない存在だ。

だから彼が僕に愛の告白をして恋人として過ごしても、終りは見えていた。

離れたくなかったけど、離れた。

それが本心だ。

言葉は僕の方が正しい。

だけど心情で言えばディムナの言つた通りだ。

一週間しか居なかつたのに、僕達は沢山話をした。帰りたくなかつた。

でも僕を育てくれた祖母の事を思うと、帰つてきて良かつたと思う。

複雑な思いが僕の中で渦巻く。

戸惑うばかりの僕を見て、彼は表情を曇らせた。

「もしかして、嫌だつたのか」

「そんな事はないよ。また逢えて嬉しい」

「ならばもう一度向こう側に来てくれないか。弟が寂しがつていてる。ツカネに会いたいと言つて泣くんだ。困つた兄を助けてくれないか。不自由はさせない。もう一度、一週間でいいんだ。弟の子守りをしてくれないか」

コチラの世界では一年が経過するということだ。行方不明で一年。

せつから第一志望の大学に入学したといふのに…心の中、現実と感情の天秤が揺れ動く。

「それは…」

「私の我がままだったようだ…」

ハッキリしない僕を見て、ディムナは失望を顔に浮べた。切ない表情。

僕の胸が軋むように痛んだ。

「待つて！」

胸が苦しくて切なくて、僕は思つまま感じじるままに口を開いた。

「僕。行きます。向こう側に連れて行つて。ディムナ」

約束 その2（後書き）

第一話からずいぶん時間が経ってしまいました。
スミマセン。反省。妖精の世界だと瞬きをする間でしようと
笑）

さて。短編にあまり時間をかけてもしょうがないので、この話は次
回で一区切りつけたいなと思ってます。
こんどは目標の「序破急」展開で行けそう。
最終回は現在鋭意制作中。明日か明後日には更新します。

僕の言葉を聞いて。デイムナは顔を輝かせた。
馬の上から手を伸ばす。

僕が彼の手を取る。

と、次の瞬間には騎乗していた。
目の前には馬の太い首が見える。
そして僕の背中を包み込む存在。
胸が奇妙なリズムを取り始める。
僕が移動したのは、彼の力だ。

思つたように思つた場所に、自分や承諾した者を異動させること
が出来る。

「私の望みを叶えてくれてありがとう」
背後から嬉しそうな声が聞える。
僕も嬉しい。

また「デイムナと過ごせることなんて。

夢のようだ。

そう思つたけど口に出せない。

言つたが最後、自分の世界に戻りたくなりそうで怖かつた。

「さて。出発するよ」

手綱を剝ると、馬が前足を上げる。

馬が足を着いた時、僕は同じような馬の集団が前方を行進していることに気がついた。

周囲を見回す。

見知つた風景が揺れている。

まるで水の中から外を見ているようだ。
もうここは既に妖精が干渉する世界だ。

厳密には僕の居た世界の隣くらいの位置関係らしい。

空間の狭間を闊歩している。

妖精の騎士達が習慣にしている、騎馬行列の中に僕達がいるのに気がついた。

馬上に乗っているのは、勇ましい騎士達。

ふと、騎士の一人が後ろを振り返った。

骨格の全てが頑丈に出来ていて、顔もそれと同じように無骨を現したような男性。

その顔には見覚えがある。

彼の乗った馬が隊を離れて、近づいてきた。

「副長。何処に行つてたんですか」

からかう色を隠さず男性はデイムナに言つた。

「迷子になつたんじやないかつて、みんなで話をしてたところで…」

言いかけて、ツカネに気がつく。視線が納得の色を帯びる。

「ああ。成る程……ツカネ。久しぶりだな」

「お久しぶりです。レー、ヴ」

「また、あの珍しいニギリメシが食べれるのか。楽しみにしているぞ」

僕が挨拶を返すと豪胆な騎士レー、ヴはにこやかに笑つた。

妖精の世界では男性は基本的に騎士や職人の仕事をする事が多いのだけど、僕は子守の仕事だったから、必然的に女性の仕事を手伝つていた。

食事は僕も作つた。材料は僕がイメージしたものを妖精に伝えると、どこから調達したのか判らないけれど、欲しい商品そのものを用意してくれた。

簡単な料理しか出来ないけど、珍しいご馳走として捉えられていたみたいだ。

普通はパンや豆もスープが主だから、確かに違うだろ。手で持つて食べられるのも、馬で移動の多い騎士達に好評だったと聞いた。

厳密に世界の構造がどうなっているのかは判らない。だけど判っているのは、彼らが人間の持つ情報を元に生活しているということ。

話を聞くと、元々はスコットランドやアイルランド辺りと繋がっていたらしい。

スコットランド人やアイルランド人と関係の深い妖精が多いからだ。

デイムナの父親がスコットランドに渡った日本人だつた。

デイムナは自分を創った人の情報を元に、人の世界を見に来て、日本を訪れ、僕と出会つた。

そして再び僕を訪ねてきてくれた。

でも疑問がひとつある。

一体どうやって僕を探したのだろう。

別れ際に交わした言葉は約束には届かないはずだ。

でも来てくれて嬉しい。

それだけは確かだつた。

二度目の訪問で僕は生活に戸惑うことなく、妖精の世界に馴染んでいた。

大きな樹木を繰り抜いた屋敷にみんなで住んでいる。僕も小さな部屋をひとつもらつた。

でもデイムナの幼い弟の世話があるから、部屋に帰るのは寝る時だけだつた。

出会つた時10歳くらいに見えた彼は今も同じくらいの年齢だ。

それはそうだろう。

僕の時間で6年経つたという事は、この世界では6週間くらい。
そんなに変らなくてもおかしくない。

一人っ子の僕は兄弟を知らない。

だから弟が出来たみたいに嬉しかった。

そして、今も…

毎日、楽しく遊び過ごした。

そして僕にこつそり教えてくれた。

「あのね。デイムナ兄様。ツカネが居なくなつてから寂しそうだつたよ」

「そうなんだ」

「僕も淋しかつたよ。ねえ、ツカネ。僕達とここですつと楽しく暮らそうよ」

「そう言われても、僕は妖精にはなれないでしよう。向こう側の人間だし…」

口に出してから、僕は自分が何にこだわっていたのか気がついた。この世界の妖精じゃないことに引け目を感じていたんだ。

「そんな事ない。ツカネは妖精の国の食べ物を口にしたんだから、もうこの世界の住人なんだよ」

「え？ 何だつて」

「もうこの世界の住人だつて言つたの。だから、術を使つて返さないようにする事も出来たのに、兄様はツカネの気持ちが大切だつて言つて元の世界に帰したんだ」

「僕の気持ちが大切」

「ツカネのこと兄様すぐ見つけたでしょ。それはツカネがこの世界の住人だつてことだよ」

自信満々に言われて僕は驚いた。

確かに、この国で出される食事はみんな食べた。

中にはキラキラ光るパンだとか、不思議な食べ物もあつたけど…

それよりもデイムナの僕に対する想いの深さを知つて、それを言わない彼の優しさに気づいて。

僕は前よりも、もっともつとデイムナを好きになつていた。

デイムナとは彼の仕事が終つた夜、弟をねかしつけた後に逢瀬を重ねた。

手を繋いで話をするだけ。

だけど、それだけでドキドキして心臓が破裂しそうだつた。でも手を離すなんて考えもしない。

このままずつと、ずっと一緒にいたい。

思いが深く激しくなつていく。

日々を重ねると、この世界が僕にとって本当の世界になつていく。以前は怖いと思つたけど、今はそれを望んでいる。

それは予感に終らず、確信になつていつた。

現実の世界で大切な人は祖母だけだつた。祖母が自分を現実に繋いでいた。

その絆が無くなつた今、次に大切なのは目の前のデイムナだ。

幼かつた恋が今時を経て、愛情へと変化している。

思いを伝えよう。僕は決意した。

明日は約束の一週間だ。

僕は自分の思いをデイムナに伝えようと思っていた。

そう思つていたら、デイムナが緊張した面持ちで先に言葉をぶつけてきた。

「向こうの世界に大切な人がいるのか？」

唐突な質問に面食らつ。

「そんな人いないよ」

あっさりと答えると、デイムナは安堵の表情を浮かべ、僕の足元に膝をついた。

顔を上げると僕を眩しそうに見つめる。

「私の求愛を受けてくれないだろうか。ずっとこの世界で一緒にいて欲しい」

僕の返事は決まっている。

自分に出来る最高の笑顔を作ろうとして…失敗した。

抑えていた思いが溢れて、両目から流れ出す。

急に泣き出した僕を見て、ディムナは慌てて立ち上がった。

「ツカネ。どうしたんだ一体。私は無茶を言ったのだろうか。やつぱり向こう側に帰りたかった？」

盛大な誤解をはじめたディムナに向つて、僕は大きく首を横に振つた。

「違う。ちがうよ。僕…嬉しくて。嬉しいんだ」

泣き笑いの顔で僕が言つと、ディムナははじめ信じられないような顔をして…徐々に眩しい笑顔に変る。

「良かつた」

ホツとした声と共に、頬を包まる。

ディムナの顔が近づいたと思つたら、唇が重ねられた。

「約束してくれる？」

「うん。約束する。ずっと一緒に……」

僕の約束の言葉は、彼が再びくちづけた事で途切れた。深くなるくちづけの気配に、僕は瞳をそつと閉じた。

約束 最終回（後書き）

これでこの話は終りです。
ここまで読んで下さいましてありがとうございました。
途中に中断した期間があつて申し訳ありませんでした。

今回の話。

私にしては珍しく直球の物語だったような…気がします。
いつもBLを銘打つても話の中心が恋愛にならない事が多くて。
ボーイズっぽいかどうかは別として、恋愛メインテーマという事で
最低限の条件はクリアしたかと思い…たい。

……あ。

この世界の妖精の証。

手の指が四本という設定を作ったのに書き忘れてました。
(妖精には人間と違う欠落した部分があることになっているらしい)
本編の話にあまり関わらないので、これはこのままにします。

さて。

次は女性主人公の異世界トリップの小説を書こうと思います。
この場所で次の話を書くのは、次の次の予定です。
魔法と妖精を書いたから、次はどんな異世界がいいかな～ワクワク～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897y/>

【異世界トリップ（仮題）】ボーアズラブ

2011年11月26日23時46分発行